

『護符』

日曜日、彼の正餐せいさんは午後三時に始まる。もちろんいつもそんな時間に食事を取るわけではない。普段の正餐せいさんは午後七時とか、七時半とか、まあそれくらいだ。なぜ日曜日に限って午後三時なのかというと、それは夜に大事な用があるからだ。

「大事な用って何だい？」と僕はそこで口を挟んだ。
「まあいいから続きを聞けよ」と彼は言った。
僕は頷き、ただその続きを待った。

彼の用とはつまり隙間すきまに入り込むことだった。実をいえばそれが彼の仕事だったのだ。

「隙間って何だよ」と僕はまた口を挟んだ。
「隙間は隙間だ」と彼は言った。「ものともものとの間のことだよ。そんなことも分からないのか？」
「分かるけどさ」と僕は言った。「どうしてそれが仕事になるんだ？」

「いいかい」と彼は言った。「彼は実は隙間人間すきまなんだ。彼はいろんなものの狭間はざまに住んでいる。現実と非現実の間。過去と未来の間。生と死の間。これで分かっただろ？」

僕は実のところほとんど理解できなかったのだが、これ以上彼を煩わずらわせたくなかったので、ただ頷いた。「分かっただよ」と僕は言った。
「それでいい」と彼は満足そうに言った。

日曜日の夜、彼は世界と世界の隙間に入り込む。部屋に一人で座り込んで、ただ意識を集中するんだ。そうするといつの間にか隙間に入り込んでいる。それはいわば、彼自身の通路のようなものだ。自己と外界との間。意識と無意識の間。彼はそこを通って実にさまざまなところに行った。普通の人がまず行けないようなところだ。彼はそこでたくさんの不思議な光景を目にしてきた。口で説明するのが難しいような。

でもそれは普段の日曜日の話だ。その日だけはちょっと事情が違った。というのも、ほかの隙間人間たちとのミーティングがあったからだ。彼らはみな基本的に時間と時間の狭間はざまに住んでいるのだが、いつもすれ違っていて、なかなか同じ時間に、同じ空間に居合わせる、ということがない。だからある一定の期間を置いて、特定の時間、特定の場所に集まることに決めたんだ。そして今年そのミーティング会場に選ばれたのが、まさに彼の部屋だったというわけだ。

彼はそのために午前中いっぱいを使って部屋の掃除をした。床を箒ほうきで掃き、

ぞうきん

雑巾で水拭きをした。至るところに掃除機をかけ、窓も拭いた。トイレをゴシゴシこすり、ついでにお風呂も磨いた。CDをきちんとアルファベット順に並べ、仕上げに腕立て伏せを五十回やった。そして部屋全体を見回した。うん。悪くない。見えるところにゴミは落ちていないし、換気をしたから空気も清浄だ。あとは飯を食って、夜に備えるだけだ。

その日のメニューはアジの干物と、味噌汁、それにポテトサラダだった。干物はもちろん買ったものだが、あとの二つはちゃんと自分で作った。お惣菜コーナーで買ったような適当なものじゃない。いや、これは何もお客さんに出すためじゃないよ。彼はそういうことが元から好きだったんだ。

そして食事を終わると、ソファに座って一眠りした。なにしろ大事な用だからな。そのときにうとうとしてたんじゃ話にならない。彼は目をつぶり、一時的に無になる。無になるというのは、そんなに難しいことじゃない。何一つ考えず、何一つしないようにするんだ。そうすればいつの間にか無になっている。

一時間ほど眠ると、大きく伸びをして、ミーティングの準備にかかる。言い忘れていたが、それはまだ寒い一月の出来事だった。日が落ちるのが早く、外はもう暗くなっている。彼は一度ベランダに出て、街の様子を眺めたあと、会場のセッティングに入る。

といっても大してすることなんかないんだ。床にあったものを脇にどかして、できるだけ広い場所を作る。彼らが自由に動くことのできる空間を作るんだ。それが一番大事。でもそもそも彼の部屋はそんなに広くないから、まあできる範囲で、ということだ。

そのあと床の真ん中に一本の蠟燭を置く。なぜ蠟燭かというと、人工的な明りはそこでは邪魔にしかならないからだ。でも蠟燭の光なら大丈夫。そう決まっているんだよ。

彼はマッチで火を点け、カーテンを隙間なく閉める。そして電気を消してしまうと、あとはただ待つだけだ。ミーティングの開始予定にはまだ時間があるが、ときどきとても早く到着する人もいる。そういう人のためにホストはじっと待っていないとちゃならない。

さっきもいったように、それは一月だったんだけど、エアコンや暖房をつけてはいけないんだ。それもまた決まっていることだ。人工的な温かみはやはり邪魔になる。面倒くさいと思うかもしれないけど、ずっと昔からそう決まっているんだよ。

彼はそこでダウンコートに身を包み、床に胡坐をかいて目をつぶっている。そして頭の中で何やらいろいろと考えている。あんなことや、こんなこと。でもその内容を今君に教えることはできない。彼にだってプライバシーというものがあるからな。

そのうち最初の訪問客がやって来る。その人物は、気付くとすでにそこにい

る。玄関とか、ベランダとかから入って来たわけじゃない。君はもう知っていると思うけど、彼らは空間と空間の隙間から入り込んでくるんだ。そうやっていつも、彼らは移動しているんだ。

最初に来たのは飛ぶオランダ人だった。

「ハイ」と彼は言った。「お元気ですか？」

青年は顔を上げた。そして蠟燭ろうそくの明かりの中にオランダ人の姿を発見した。彼はオランダ人なだけあって、背がとても高い。そして飛行士が被るかぶ、あの変な帽子かぶを被っている。彼は大体いつも空を飛び回っているんだ。

「どうも」と彼は言った。「あなたは？」

「私はいつも元気ですよ」とオランダ人は言った。そしてにっこりと微笑んだ。「そうすれば人生は大体うまくいきます」

二人は並んで座り、ただそこにある火を眺めていた。何かしゃべることもできたが、特にしゃべりたいとも思わなかった。彼らはまあ、そうやってじっと座っていることが好きだったんだよ。

次に来たのが魔女だ。中世ヨーロッパの衣装を着て、怪しげな杖を突いている。彼女はボロボロの箒ほうきに乗ってやって来た。一見すると年寄りに見えるし、別の角度から見るととても若く見える。でもまあ魔女だからな。どれが本当の姿なのかは誰にも分からない。

「こんにちは」と彼女は言った。「しけた面つらしてんね」

でも彼女だってしけた面つらをしていたんだ。

次に来たのはサンタクロースだ。彼は十二月に一仕事終えて、フィンランドで休暇中だったんだが、空間を飛び回ってやって来た。リンリンリンという櫓そりの音が遠くから聞こえたかと思うと、それはもう部屋の中にあり、トナカイが準備されていた水をピチャピチャと飲んでいて。部屋の中はむっとする獣臭けものくささで一杯になった。

「やあ」とサンタクロースは言った。「どうだいみんな」

三人はそれぞれ返事をし——みんな大体元気だった——青年は立ち上がってトナカイの頭を撫でた。それは気持ち良さそうな声を上げ、またピチャピチャと水を飲んだ。

これで四人が揃った。もっともいつも四人というわけじゃない。不定期でさまざまな人がやって来る。子どもたちとか、鳥とか、犬とか、そういうものだ。ときどき魔女が余興のために過去の人間を連れて来ることもある。リンカーンとか、マルクス・アウレリウスとか、そういう人たちだ。そして演説を聴くんだ。彼らは実に気持ち良さそうにしゃべっていったよ。もっとも青年は英語もラテン語も知らなかったから、何を言っているのかさっぱり分からなかったけ

どな。まあそういう立派な人たちならいいのだが、前に何かの手違いでアドルフ・ヒトラーが演説に来たことがあった。その迫力たるやすさまじいものだったんだけど、聴衆の誰もナチス式敬礼を返さなかったから、怒ってそのまま帰ってしまった。まあそれはそれでよかったんだけどね。

ただ今日のところは余興はなしだ。なにしろホストは青年だから、魔女はおとなしくしている。彼女が誰かを呼ぶのは、自分がホスト（正確にはホステス）のときだけに限られている。今日はただシンプルに会合おこなを行う。

「ええ、ではみなさん揃いましたね」と青年は言った。そして残りの三人の顔を見た。飛ぶオランダ人と、魔女と、サンタクロースだ。サンタクロースはいつの間にかタバコに火を点けている。

「サンタクロースさん」と彼は言った。「実はこの部屋は禁煙なんですけど・・・」
「いや、悪かった」とあまり悪くなさそうに老人は言った。そして持っていた携帯灰皿にぐいとタバコを押しつけた。「ついやってしまうんだよ。長年の癖くせだね」

青年はそこで一度咳払いをし、もう一度最初から始めた。「ええ、ではみなさん揃いましたね」。そしてあらためて三人の顔を見た。三人もまた彼の顔を見つめていた。

「ただ今から定期会合を始めます。これはまあ、いつも通りの会合ではあるんですが、普段とはちょっと変わったことがあるんです」

「それは何ですか？」とオランダ人がすかさず訊いた。
「最近隙間がひどく不安定になっているんです」と彼は言った。「ところどころ狭くなっているかと思えば、ものすごく広がっている場所もある。これは以前にはなかったことです」

三人は黙って聞いていた。彼は先を続けた。
「そしてその広がっている場所に、何か悪いものが巣食っている可能性があります。僕はそれをひしひしとを感じるんです。たとえば僕は眠るとき完全な無になりますが、だんだんそれが難しくなっている。無だと思っていたのに、起きるとそこには何かが入り込んでいたあとがある」

「つまり？」と魔女が言った。
「僕が眠っている間に、誰かが僕の身体を利用している可能性がある、ということですよ」

「実際に何か起きた、という証拠はあるのかい？」とサンタクロースが言った。

「それはまだないんです」と青年は言った。「でもすごく嫌な予感がします。見てください。僕の右手は最近黒く染まってきている」

彼はそこで右手を差し出した。といってもそれはごく普通の手に見える。でも彼が「黒くなっている」というとき、それは単なる色のことだけじゃないんだな。それはたぶん影かげのことだ。蝋燭ろうそくに照らされた影を見ると、その部分だけ

真っ黒に染まっていることが分かる。残りの三人はそれを見て息を呑んだ。

「これは・・・」とオランダ人が言った。

「前にも見たことがあるよ」と魔女が引き継いだ。「あたしの夫だった男さ。あいつは全部この色に染まっていたがね」

「そうするとどうなるんだ？」とサンタクロースが訊いた。

魔女は一度目をつぶり、深い溜息ためいきをついた。そして言った。「心が闇に染まってしまうのさ。そうするともう誰にもコントロールすることはできない。本人にさえだ。本当はそのまま死んでしまえばいいんだろうが、死ぬこともできない。永遠に奴らの手先に使われる」

「奴らとは？」と今度は青年が訊いた。

「それはまあ、あんたも実は分かっているんだろ？」と魔女は言った。「隙間を通り抜けているときに、気配を感じたことがあるはずだ」

「彼らは実際にいるのですか？」と青年は言った。「たしかに気配を感じることはあります。この闇の奥に何かがあるのだと。でも僕は、まだ実際にはその姿を目にしたことがないのです」

魔女はまた溜息をついた。そして言った。「あんたらはまあ、ある意味ではずっと無邪気に生きてきたのさ。隙間を利用しているのは何も私たちだけじゃない。それくらいは知っているだろう？」

「ええ」と青年は言って頷うなずいた。

「そこには危険なものやら、邪悪なものがうようよしている。あんたの想像もつかないようなものが」

「でも僕はこれまで一度もそういうものに遭遇しなかった。それはなぜなんだろう？」

「それはね」と魔女は言った。「まず単に運がよかったからさ。あんたが使っている通路は、大して大きなものじゃない。それに隙間のそれほど奥深くを通っているわけでもない。だからあまりほかのものがやってこなかったんだ。あと一つはだね、あんたが心に『護符』を持っていたからだ」

「護符？」と青年は言った。

「そうだよ。護符だ」と魔女は言って頷うなずいた。「もっともそれは目に見えるものじゃない。それはいろいろと形を変えるものなんだ。だからこそ護符になり得る。あんたはそのおかげで、これまで無事に生きてこられたのさ」

そこで彼女は黙り込んだ。残りの二人もまた黙っていた。部屋の中はしんとして、何の物音もしなかった。

「黒いサンタクロースのことを聞いたことがある」と突然サンタが言った。「ずっと昔のことだ。サンタの仲間に聞いたんだ。彼によれば、そいつは夏至げしの頃に活動する。夜遅く起きている子どもを誘惑し、そのままどこかに連れ去ってしまうのだそうだ。その後子どもがどうなるのかは分からない。そうやって何

人も子どもたちが消え去った」

「彼はその後現れなかったのですか？」とオランダ人が訊いた。

「どうも何年かおきに現れるみたいなんだ」とサンタクロースは言った。「でもそれが世界のどこなのかも分からないし、その間隔が百年以上空^あいていることもある。だから誰も彼を捕まえられないんだよ」

「そいつもきっと闇の住人だね」と魔女は言った。「そうやって子どもたちを集めて、自分の都合の良いように利用するのさ」

「それで僕はどうすればいいんでしょう」と不安になりながら青年は言った。

「このまま放っておいていいわけじゃないんでしょう？」

「もちろんだ」と魔女は言った。「さっき言った護符のことだ。あんたのそれはずいぶん弱くなっている。でもまだ多少は力が残っているから、今ここにいられるんだ。もしそうじゃなかったら一体どうなっていたか」

「どうすればそれを取り戻せるんです？」と彼は訊いた。

「うん、そうだね」と魔女は言った。「それにはまずあんたを解体する必要がある。分かるかい？ 今あんたが持っている護符は、あんたが生まれる前から存在していたんだ。そしてその周りにくっつくようにしてあんたが存在している。だからそこをいじるには、一旦あんたそのものを解体しなくちゃならない」

「でもそうしたら、僕は僕でなくなってしまうんじゃないですか？」

「ある意味ではそうだ」と魔女は認めた。「でもある意味ではそうじゃない。というのも、その中心にある護符こそがあんたの本質だからだ。まあ、どちらを取るかによるね。あるいは多少見た目は変わるかもしれない。でも本質は変わらない」

「もしうまく解体できたとして」と青年はなんとか話についていきながら言った。「その護符は、そんなに簡単に強化できるものなんでしょうか？」

「それは正直いってやってみないことには分からない」と魔女は言った。「さっきも言ったように、それは形というものを持たないものだ。だからそのやり方も人によって違っている。誰かほかの人が上手^{うま}くいったからといって、あんたがそのやり方で必ず上手^{うま}くいくわけじゃない」

青年は少しの間黙り込み、それについてじっと考えていた。でもすぐに決心した。「それでも僕はやりますよ」と彼は言った。「そうしないと、僕は闇の手先に使われてしまうことになる」

彼らはそこでまた黙り込んだ。オランダ人とサンタクロースは、ただじっと二人の話を聞いていた。トナカイが顔を上げ、その首に付いた鈴がリンリンと鳴った。

彼らは具体的な計画を立てることにした。まずなんとかして青年を「解体する」必要がある。しかしそれはすぐに、この場でできることじゃない。だってそんなことをしたら彼は実際に死んでしまう可能性があるから。というのもこ

ここはごく普通の重力の下にある、ごく普通の世界だったし、そこでは人は簡単に解体されたりはしないからだ。のこぎりでゴリゴリと切り取られたりしない限りはな。

だから彼らは狭間に下りていくことにした。この世とあの世の間。過去と未来の間。しかしそれはいつも彼らが行っている安全な場所じゃない。そこからさらに下の方に下りた、もっとずっと深い場所だ。海でいえば、海溝の、さらに一番深いところだ。光なんかまったく届かない。でもそこまで行かないと、人間はうまく解体されることができないんだ。

魔女が三人を案内する。彼女はずっと前に一度だけそこに行ったことがあるんだ。夫を取り戻すためだ。でもそれはうまく行かなかった。実際に何が起こったのかは分からない。彼女はそのことについて、それ以上詳しい説明をしてくれなかったからな。

そこに着くと、彼女は切れ味鋭いナイフで彼の皮膚を裂く。そしてその下の肉も切り取っていく。といってもそこはもうあの世に近いところだから、彼が死んでしまうことはない。肉体というものがほとんど意味を持たないところなんだ。なんというのかな、それはただの名残みたいなものだ。そこでは表層的なものが簡単に剥がれ、その中心の本質的なものが姿を現す。肉を切り裂くと、そこから彼の本質——つまり魔女のいう『護符』だ——が現れる。それがどんな姿をしているのかは、まあ見てからのお楽しみだ。というのもその部分は人によって違う姿をしているからだ。そしてそこでようやくオランダ人とサンタクロースの出番になる。彼らは切り取られた青年の肉体を——つまり表層だ——もう一度それにくっつけていく。そこで重要なのが、前とはほんの少しだけその配置を変えるということだ。もっとも右腕を左側に付けるとか、頭をおしりに付けるとか、そういうことじゃない。それはもっと細胞レベルでの話だ。身体の機能は同じだが、個々の細胞の配列を変える。なぜそんなことをするのか？ 新しくなった青年には、そのための新たな肉体が必要だからだよ。そしてそんなことができるのは、その狭間の、ずっと底の方でしかない。

そして青年だ。彼が何をするかというと、それは「自分自身ときちんと向き合う」ということなんだ。彼は肉体を剥がされた時点で、まっさらな自分自身になっている。これ以上ないくらい。もちろんそれはとても危険なことだ。それもそんな闇の中だ。でもまさにそれが必要なんだよ。その間悪いものが近寄らないよう魔女が守ってくれている。だからその隙に彼は何かを成し遂げなければならない。何か。うん、分かるよ。それじゃああまりにも漠然とし過ぎているよな。でも実際ここが一番重要なんだが、その部分だけは行ってみなければ分からないんだ。さっきもいったように、護符というのは人によってその形が違っている。だからその強化のしかたも人によって全然違うんだ。いいかい？ その「違う」というところこそが大きな意味を持っているんだ。

ということで彼らは計画を実行することにした。サンタが乗ってきた櫓そりに乗って出発だ。もちろんみなそれぞれの通路を持ってはいるんだが、それが交まじわることはめったにない。というのもその通路もまたそれぞれ個人的なものだからだ。そんなわけで四人で移動するには櫓そりの方が便利だったんだ。

彼らは部屋の壁を抜けて——抜けたところで隣人の部屋に行き着くわけじゃない——狭間の世界へと下りていった。トナカイがリンリンと音を立てて、勢いよく走り始めた。過去と未来の間。この世とあの世の間。善と悪の間。彼らはいろんなものの隙間を縫ぬいっていった。その間ほとんど話をしなかった。ただじつと鈴の音に耳を澄すまませていたんだ。

やがてその谷の入口に着いた。こんなところまで来たのは魔女以外は初めてだった。そこは真まっ暗な空間で、下にはどす黒い渦うずのようなものが見えた。今彼らはどうしてもそこに行かなくちゃならなかったんだが、トナカイが怯おびえて足を止めた。サンタは優しく手綱たづなを引っ張り、後ろからその頭を撫なでた。「大丈夫だ」と彼は言った。「わしがついておる」

トナカイはもう一度地面を——というか空間を——蹴こり上げて、その先に進んだ。

そしてその場所たどに辿り着いた。周りには本当に暗い。魔女が杖の先にほんの小さな明かりを点けていたから、かろうじて周囲が見渡せるだけだ。もっとも彼女によれば、それもまたずいぶん危険なことだったらしいのだが。

「だってこんなものを点けていたら、奴らに自分の居場所を知らせるようなものじゃないか」。だから早々そうそうにその明かりは消した。

彼らはそこで計画を実行することにした。魔女がナイフを使い、青年の皮膚を切り裂くんだ。青年は着ていた服をすべて脱ぎ、完全に魔女に身を任せた。彼女は手際よくことを進め、青年の表層をどんどん剥はぎ取っていった。オランダ人とサンタクロースはその間邪魔はにならないところによけていた。

やがて青年の本質が姿を現した。それはほんのりと淡い光を放ち、彼らの前に浮かんでいた。それは美しい光ではあったものの、たしかに弱はっているようにも見えた。オランダ人とサンタクロースは剥はぎ取られた表層を持って、今か今かと準備していたんだが、まだそれを継つぎ合わせるには早かった。それはこの本質が十分な力を得てからでなければならない。

その間青年は自分自身と向き合っていた。まったくの純粋な自分自身だ。自分がそうだと思っていた見せかけのものではなく、事じ実じそうである自分自身だ。そこは広い荒野わづのような場所だった。固い土と僅わずかばかりの草。といってもず

っとそれが続いているわけじゃない。よく見るとすぐ先は崖がけになっていて、海が見えた。あたりは薄暗く曇っていて、みぞれが降ってきていた。風が吹いたが、それはまったく友好的な風なんかじゃなかった。ものすごく冷たくて、人を芯こゝろから凍えさせてしまうような風だ。彼はそんな場所にたった一人で立っていた。海は荒れていて、大きな波が立っている。彼は冬物のコートを着てはいるんだが、それでも寒いことに変わりはない。次第にみぞれは雪に変わったが、それは水分を含んだ、重い雪だった。今それが何度も彼の顔にぶつかった。

しばらく何も起こらなかった。雪が降り、繰り返し波が打ち寄せていただけだ。彼はただそこに立っていたんだが、そのときふと崖の縁ふちのところに何かを見る。一番端はじのところに誰かがいるみたいなんだ。目を凝らすとそれは一人の子どもだった。十歳くらいだろうか。彼は迷わずそちらの方に歩いて行った。

近づくと、実はそれが十歳の頃の彼自身だったことが分かった。いいかい、これこそが彼の『護符』だったんだ。つまり彼の本質とまっすぐに結びついているものだ。今彼はそこに座り、足を崖から出してぶらぶらさせていた。青年は何も言わぬまま、そのすぐ横に座り、同じように足をぶらぶらさせた。

彼らはしばらくそこで海を見つめていた。灰色の、荒れ狂う、何のために存在しているのかも分からないような海だ。でもそこでふと青年は思う。それをいえば自分だって何のために存在しているのか分からないじゃないか、って。そこで彼は横を見るんだが、そこにいる子どもは明らかに弱っていた。瘦せて、目に隈くまができています。彼もまた冬物のコートを着てはいるんだが、その中でぶるぶると身を震わせている。雪がだんだん強くなってきて、彼ら二人を白く覆っていった。

そのとき青年は自分の中にある衝動が湧いてきていることに気付く。このままこの子と一緒に飛び下りてしまえばいいんじゃないか、とな。下を見ると、そこには突き立った岩が見える。きっと何も考えずに死んでしまうことができるだろう。それはなんとというか、彼には魅力的な選択肢えらびに思えた。何も無理に生き続ける必要はないんじゃないか、とな。

でもその子の顔を見て、すぐに思い留とどまった。なるほどたしかにその子は弱ってはいたが、悲観的になっているわけではなかったからだよ。ぶるぶると震えながらも、彼は熱を持って生き続けていた。「生き続けたい」と本能的に願っていた。彼は今薄く積もり始めた雪の上に、何かの絵えがを描いていた。ちょうど青年の反対側の地面にだ。何の絵かは分からない。一体何を描いているんだろう？ そう思って彼は無理に首を回してそっち側を見た。

そのとき何かが起きた。何が起きたのか、最初はうまく把握することができなかった。気付くと二人とも宙に投げ出されていたからだよ。始めこそ「飛び降りようか」と思いはしたが、今青年には死にたいという気持ちなんかこれっぽっちもなかった。でも首を回して絵を見ようとした瞬間、何かが起きて、彼

らは二人とも崖の下に落っこちていたんだ。

彼は空中で子どもの自分を抱きしめた。子どもは無表情のまま、ただされるがままになっていた。ごめんな、と彼は思った。まだ生きてかっただろうに。

でもそのとき、子どもの心臓が熱く火照^{ほて}っていることに気付いた。それは尋常じゃない火照り方だった。ものすごく熱いんだ。彼らはどんどん下に落ちていく。突き立った岩が、すぐ目の前に見える。でもそんなことはもう大した問題ではなかった。というのもその心臓の熱が二人をドロドロに融かしてしまったからだよ。

彼らは空中で一つに混ざり合った。その上に雪が降ってきたが、そんなものはすぐに蒸発してしまった。ドロドロだから、岩にぶつかったところで痛みなんか何も感じない。彼らはまるで溶岩みたいに、そのまま海を蒸発させながら進んでいった。もっとも彼らは冷えてカチカチの岩になったりはしなかった。そのまま熱く燃え続け、どんどん先に進んでいった。彼らの進む先にはそうやって自然と道ができていった。まるで聖書の中で誰かが海を割って進んでいったみたいに。彼らはそうやって進み続け、ついに地球のもっとも深い場所に達したんだ。

そこで意識を回復すると、青年はすでに櫓^{そり}に乗っていた。トナカイの鈴の音が聞こえる。彼らはひとまず目的を達成して、現実目指して帰っていく途中だったんだ。青年は自分の身体が熱く火照^{ほて}っているのを感じることができた。身体中の細胞が、新しい栄養を得たみたいだった。前の席で、サンタクロースが手綱^{たづな}を握っているのがかすかに見えた。その隣では魔女が何やらぶつぶつと呪文^{つぶや}を呟いている。青年の肩をオランダ人が優しく支えていた。「大丈夫」と彼はオランダ語で言った。「何も心配しないで」。青年はオランダ語を知らなかったが、そこは狭間^{はざま}の世界だったから、何の苦もなくそれを理解することができた。

やがて部屋に帰り、青年はもう一度元の自分の生活に戻った。彼の右手にあった黒い影は、もう跡形もなく消え去っていた。残りの三人は明らかに疲れてはいたものの、すごく充実した表情を浮かべていた。

「あなたがあなたと向き合っていたとき」とオランダ人が説明してくれた。「私たち三人もまた、それぞれ自分自身と向き合っていたのです。それはとても不思議な体験だった」

「あのとき僕は・・・」と青年は、あそこで自分が経験したことをみんなに話して聞かせようとした。でもすぐに魔女が遮^{さえぎ}った。

「それをしゃべってはいけないよ」と彼女は言った。「しゃべってしまうとそ

れは固まってしまふんだ。それはたまたまそういう形を取った、というだけのことなんだ。大事なのはあんたが何をどう感じたか、ということだ」

もうみな元の場所に帰る、という頃になって、サンタクロースがそっと耳打ちをした。

「君は魔女に感謝しなくちゃいけないよ」と彼は白い髭ひげの奥で言った。「彼女は君が君に向き合い、我々が君の肉体をくっつけている間、ずっと闇の連中に対抗していた。夥おびただしい数の闇の連中だ。ひっきりなしに呪文を唱え、我々を守ってくれていたんだ。それはさぞかし大変なことだったろう」

「あの人もまた自分自身と向き合っていたのでしょうか？」と青年は訊いた。「ある意味ではね」とサンタは言った。「あそこでは誰もが裸にならざるを得ないのさ」

そして人々は帰っていった。次の会合があるのはもっとずっと先だ。魔女はほうき箒に乗って、オランダ人はただ飛んで、サンタクロースはもちろんそり櫓に乗って。青年は一人一人と握手をして別れた。一人になったあと、カーテンをそっと開けてみたが、外はまだ真っ暗だった。時間を見ると、ちょうど日付が変わったところだった。昨日と今日の間。そろそろ眠る時間だったが、彼は眠りたいとは思わなかった。身体の中で、あの熱がまだグルグルと渦巻いていたからだ。あの少年は一体何の絵を描いていたんだらうな、と彼は思った。あるいはそれを、これから自分が描いてみるべきなのかもしれない、と思ったのは、それからほぼ一時間後のことだった。